

# 農村と都市のエスニシティ

## ——グアテマラのインディオとラディーノ——

キーワード：農村共同体，先住民，グアテマラ，エスニシティ

小 泉 潤 二\*

Rural and Urban Ethnicity : *Indios* and *Ladinos* of Guatemala

**Key Words** : rural community, indigenous people, Guatemala, ethnicity

KOIZUMI Junji

The population of Guatemala, which exceeds ten million today, is divided into two groups: *indígenas* (or *indios*) and *ladinos*. The former comprises the majority of the Guatemalan population, but there is an extremely wide range of estimates of the exact numbers. It is impossible to determine the exact population ratio, due to the ambiguous nature of the ethnic boundary. While there is a clear boundary between the *indios* and *ladinos* and the tension between the two groups is fairly high, the actual definition of each group is indeterminate. *Ladinos* are viewed as non-*indios* and *indios* are viewed as non-*ladinos*; thus they comprise inverse images. Frequently *indios* are defined by their language and clothing, but we should also consider the rural-urban axis as an essential factor in the ethnic dimension. This is not the same as Robert Redfield's folk-urban continuum; instead we should reconsider the meaning of "rural community" as the essential component of the identity of *indios* and urban orientation as essential to the identity of *ladinos*. By looking at the problem from this angle, we can readily understand the issue of identity change, i.e. *indios* becoming *ladinos*. The boundary between the two groups is porous and flexible, and there are a number of ways for *indios* to become *ladinos*. In particular, the tremendous number of *indios* who quietly move from rural communities into urban settings come to define themselves as *ladinos*. However, many educated urban *indios* now claim that their primordial identity is Mayan, and this pan-Maya movement may play an essential role in the development of Guatemala's political future.

---

\* 大阪大学人間科学部・教授

中米グアテマラの人口は現在1,000万を越え、急速に増加しつつある。1962年時点では約400万だった。グアテマラ農村部での人口増加率を3.5%としている資料もあり、きわめて高い。私が現地調査の対象としてきた、グアテマラ北西部の農村地域のマム Mam (マヤ) 共同体については、閲覧した1978年の資料による増加率を約4%と計算することができた。やはりこれは、四半世紀で2倍になる速度である。

グアテマラの出生登録には、父母の「エスニック集団」 grupo étnico を記入する欄があり、これは4つに分類されている。「ラディーノ ladino」「インディヘナ indígena」「黒人 negro」「黄色人 amarillo」である<sup>1)</sup>。グアテマラの場合、植民地時代に奴隷として導入され、また後の時代にカリブのイギリス植民地から労働者として移り住んだ黒人は少ない。19世紀以降の近代移民としてのアジア系も多くない。したがって上に見たように急激に増大するグアテマラの人口は、実質的にはインディヘナとラディーノ、つまり先住民インディオ indio と非先住民とに二分されている。

数千人のシンカ Xinka やガリフナ Garífuna を例外として、グアテマラのインディオはすべてマヤ系の人々である。マヤのなかでも、キチェ K'iche'、マム Mam、カクチケル Kaqchikel、ケクチ Q'eqchi'などの集団は、それぞれ百万から数十万の人口を擁し、そのほかハカルテコ Jakalteko、カンホバル Q'anjob'al、イシル Ixil、ツトゥヒル Tz'utujil、ポコムム Poqomam など、数多くのマヤ系集団が、それぞれ強い親縁性を持ちながらも、独自の言語集団をつくっている。

このような先住民人口の多さが、中南米におけるグアテマラを「民族的に」特徴づけている。グアテマラは、南米ボリビアなどと並んで、先住民比率が最も際立つ国家のひとつであり、国民の約半数が先住民であるとされている。

しかし、「約半数」といっても、正確なところは不明である。半数弱とするものもあるし、56%とするものもあるが、60%という数字を用いるものもよく見る。最近の K. Warren の論文は、グアテマラ全国民の中で「マヤ語を使う人」の比率は、極端に少ない場合には36%、極端に多い場合には70%とされとしている。そして「エス

1) John D. Early, *The Demographic Structure and Evolution of a Peasant System: The Guatemalan Population* (Boca Raton: University Press of Florida, 1982), p. 17.

「ラディーノ」という言葉と概念は、明らかにラテンアメリカの地域によりその意味が異なる。本稿で扱うような「ラディーノ」概念は、グアテマラのほか、メキシコ南東部と中央アメリカ諸国に限ってみられるようである。またこの概念は、その意味に空間的な差異があるばかりでなく、時間的にも当然変動する。実際 C. Smith は、現代のグアテマラにみられるようなラディーノとインディオの分離と対比は、19世紀初めのグアテマラの独立の後に、エリート層が国家としてのグアテマラを「創造しようとする中で創造された」としている。Carol A. Smith, *Failed Nationalist Movements in 19th-Century Guatemala: A Parable for the Third World*, in Richard G. Fox, ed., *Nationalist Ideologies and the Production of National Cultures* (Washington: American Anthropological Association, 1990), pp. 148-117.

ニックなマヤ」の比率については、少ないときで42%、多いときには実に国民の87%とされることもあるという<sup>2)</sup>。

両極端の数字はおそらく現実から離れており、実際の「マヤ」の比率は現時点で国民の過半数程度とするのが妥当であろう。しかし、4割以下から9割近くまでという、極端に離れた数字があること、そして少なくとも一致した数字が得られそうもないことは、何を意味しているのだろうか。

容易に考えられるのは、統計上の不備である。また、これほど急速に人口増加が進んでいるときには、どの時点をとるかによって比率にかなりの差が出ることも予想される。さらに、数字を用いる者の利害が関わることも考えられる。先住民の側は先住民の比率を高く、非先住民の側は低く見積もる傾向があるはずである。

しかし、最も重要な理由は、そもそもグアテマラのマヤとマヤではない人々の間、先住民インディオと非先住民ラディーノの間の、「エスニックな境界 ethnic boundary」の曖昧さではないか<sup>3)</sup>。

このような曖昧さは、少なくとも中米について一般化できそうに思われる<sup>4)</sup>。たとえばグアテマラの隣国エルサルバドルには、しばしば「インディオはいない」とされる。しかし最近の報告は、エルサルバドルの人口500万余の約1割が先住民であることを推定している。エルサルバドルの場合には、1932年初頭のマキシミリアーノ・エルナンデス・マルティネス Gen. Maximiliano Hernández Martínez 政権の時代に、農民の大規模な武装蜂起が起こったことが大きな意味を持ったように思われる。この反乱に対する政府軍の徹底的な攻撃は、インディオに対する「人種戦争」の色彩を帯び、インディオは自らの衣装や言語や習慣を捨てることにより自己防衛を試みたとされている<sup>5)</sup>。

グアテマラの場合に戻れば、「インディオ性 Indianhood」を捨てさせるような歴史

2) Kay Warren, "Language and the Politics of Self-Expression: Mayan Revitalization in Guatemala," *Cultural Survival Quarterly*, 18(2, 3) (1994), pp. 81-86.

3) 「エスニックな境界 ethnic boundary」の概念は、人類学における古典的なエスニシティ研究としての、Fredrik Barth, *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference* (Boston: Little, Brown and Company, 1969). によっている。エスニックな境界をめぐる相互作用、また境界がどのように「みえる」かに注目する現象学的 phenomenological なアプローチについては、本稿ではほとんど取り上げなかった。この点については、拙稿「境界を分析する——グアテマラの場合」黒田悦子編『民族の出会いのかたち』(朝日新聞社, 1994) pp. 61-82. で問題の一部を論じた。

4) インディオのアイデンティティの「曖昧さ」という概念は、南米を含めてラテンアメリカに広く適応できるものであることが、地域研究企画交流センター国際シンポジウム「ラテンアメリカの都市と農村」(1995年12月 於国立民族学博物館)の参加者たちにより指摘された。

5) Thomas P. Anderson, *Matanza: El Salvador's Communist Revolt of 1932* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1971).

的事件は、少なくとも大きな規模では起こっていない。しかし、インディオと非インディオとの間に厳しい緊張と対立の関係があることに違いはない。S. Tambiah<sup>6)</sup> は、国家をエスニックに二分するこの対立を近年のグアテマラの政治暴力との関連で取り上げ、これを現代世界で最も「過激で悪名高い」ものとして、南アフリカの「非対称的」(人種差別的) エスニシティや、ウガンダのエスニックな大量殺戮と一対にして論じている。

そうではあるにしても、グアテマラのインディオとラディーノの間のエスニックな境界については、日常的な不確定性がある。インディオとラディーノの区別という社会的現実があり、そこに激しい非対称や葛藤があることは明白であっても、インディオとラディーノ、先住民と非先住民が、実際には何により区別されるかはそれほど明白ではない。

ラディーノという言葉は、メスティソすなわち混血と同義とされることもある。その意味でラディーノは、人種的特徴を指す語であり、そうした特徴をある程度まで示している。しかしこの「ある程度まで」が微妙であり、ラディーノの中には純粋な白人もインディオとの混血も、また純粋なインディオもみられる。逆にインディオの中には混血も少なくない。もし、不正確になる可能性を排除しようとすれば、ラディーノとは「非インディオ」のことである、となり、これが最もよく使われる定義である。

しかし、ラディーノが非インディオであると言うためには、それに先だってインディオが何であるかを言わなければならない。ところがこの「インディオ」も不明瞭であり、実際のところ慎重になろうとすれば、インディオとは「非ラディーノ」である、とするほかない。

ラディーノとインディオはエスニックな対立項であるという確固とした感覚がある一方、実際の定義づけでは曖昧模糊とした様相がみられる。このような対照性は、このグアテマラのエスニシティが相互的に規定されていることの反映である。ラディーノはインディオとの関係において、またインディオはラディーノとの関係において定義されている。J. Hawkins<sup>7)</sup> の「逆転画像」inverse images という形容は、グアテマラの状況を的確に捉えている。インディオでなければラディーノであり、ラディーノでなければインディオであるという同語反復は、両者の間に境界があるという事実を確認している。

6) Stanley J. Tambiah, "Ethnic Conflict in the World Today," *American Ethnologist*, 16(2). (1989), pp. 335-49.

7) John Hawkins, *Inverse Images: The Meaning of Culture, Ethnicity, and Family in Post-Colonial Guatemala* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1984).

その境界のどちら側に自己が位置するか、つまり自己のエスニック・アイデンティティは、グアテマラの場合自己規定によるところが大きい。N. England が言うように、ここでのエスニック・アイデンティティは「言語を基礎としながらも」主として自己定義によっている<sup>8)</sup>。自らをインディオとする人がインディオであり、ラディーノとする人が、委細はともかくラディーノである。

そのような自己規定の基礎となるものとして通常あげられるのは、「言語」に加えて「民族衣装」であり、時には「生活様式」である。キチェ語を使用する人がキチェであり、したがってマヤであり先住民インディヘナである、共同体トドス・サントス Todos Santos の衣装を着ける人がトドス・サンテロ Todos Santero であり、したがってマムでありマヤであり先住民である、ラディーノの生活様式を採る人がラディーノである、ということになる。

こうした要因によりアイデンティティが規定されることを否定する必要はない。ただ、それらの要因に重ね合わせて、都市と農村という軸を考えるべきではないか。インディオの生活空間は農村的であり、ラディーノの生活空間は都会的である、ということである。これはほとんど当たり前に聞こえ、レッドフィールドのモデルを思い起こさせるかもしれないが、しかしこれは両者の生活空間についての単なる形容ではない。それよりはるかに重要な問題を含んでいる。「都市」と「農村」という生活空間が、ラディーノとインディオという、グアテマラを分断し、ときには暴力的対立にも翻訳されるようなアイデンティティの、基本的構成要素となっているかもしれないという問題である。

「農村」の生活空間といっても、農村が「共同体 community」としての空間をつくっているという事実が重要である。インディオのインディオとしてのアイデンティティには、共同体性が深く関わっている、という捉え方により、インディオ＝ラディーノ間の境界の性質の少なくとも重要な部分が明らかになる。インディオとは、共同体の（マヤ）言語を用い、共同体のユニフォームとしての（マヤ）衣装を着け、共同体の内にある者同士で結婚し、共同体の土地を耕し、共同体での経済活動に従事し、共同体の規定する儀礼に参加し、共同体の要求する共同体的義務を果たし、共同体の採用する共同体的生活様式を採用する人々のことである。そしてこの共同体は、農村部に位置する農村共同体である。「想像の共同体」<sup>9)</sup>ではない。インディオの国家への帰属意識は、一般に低い。

8) Nora England, "Lengua y definición étnica entre los mayas de Guatemala," *Mesoamérica*, 22, (1991), pp. 311-22.

言うまでもなく、農村に生活するラディーノがいないわけではないし、都市に生活するインディオがいないわけでもない。しかしそこには、明らかに志向性 *orientation* における違いがある。農村部のラディーノは、たとえ農村に生活しても都市を志向し、共同体を志向しない。都市部のインディオは、農村を志向し、共同体を志向する。

このようにエスニックなアイデンティティを、都市や農村や共同体への「志向性」に関わる問題として捉えようとするとき、アイデンティティの変更という問題が見えやすくなる。

グアテマラのエスニシティが、緊張や蔑みをはらむものであっても、インディオとラディーノを「隔てる」境界は、すべてをはね返す強固な「壁」ではない。そこには柔軟性 *flexibility* や透過性 *porosity* のみられることが多い。境界は意外に目が粗く、口語的に言えば「ザル」なのであり、実際に観察される社会過程において、人が境界を通過して別の、ときには対立する集団内へと浸透ないし越境すること (*passing*) が起こる。

ここでの越境は、インディオがラディーノになるということである。境界を通り抜けるインディオの側からの一方向的な流れは、陰に陽に常にあった<sup>10)</sup>。にもかかわらず境界は厳然としてそこにあるかに見える。なぜ、そしてどのようにして越境が起きるか（そして、起きないか）という肝心な問題は、調査も分析もきわめて不十分であるが、アイデンティティを変更して境界の向こう側へ出る道筋は何本もついている。よく知られているのは、若者が共同体外でラディーノの女性と結婚するような場合、またプランテーションなど雇用のある場に移住する場合である。その他にも、プロテスタント系の宣教活動に参加する場合や、商人として共同体外で商業活動に従事する場合も、志向性の変更が起きやすい。また、インディオが軍に徴用され軍事訓練を受け言語能力を身につけるような場合も、きわめて重要であるように私には思われる。

このような志向性とアイデンティティの変更の現場に立ち会うかのような好例を、O. Carrescia の作成したビデオの中に見ることができる<sup>11)</sup>。2本からなるこの「民族誌

9) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London: Verso, 1983). 邦訳: 白石隆・白石さや訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』(リブレポート 1987)。

10) 逆方向のプロセスとして、ラディーノがインディオになることがあるかについて、上記注4のシンポジウムの参加者から質問があった。現在とはまったく過去において、そうしたことが起こったことは論理的に考えられ、具体的実例があればそれが起こる状況について知りたいと考えている。現在の「インディオ」共同体には、コーカソイドの血が相対的に濃い例があるが、過去においてラディーノ流入の経緯があったことを反映する場合も含まれているかもしれない。推測ではあるが、インディオ共同体の土地の利用権を外部の(非インディオの)土地なし農民が確保しようとするのが、そうしたアイデンティティ変更の経済的動機として考えられる。

的」ビデオは、グアテマラ北西部のママ語圏の農村共同体、トドス・サントス・クチュマタン Todos Santos Cuchumatán についてのものであり、一方は1979年、他方は1987年に撮影され、その間の変化を記録している。

この時期は、1979年にニカラグアでソモサ政権が倒された後、グアテマラの左翼ゲリラ組織の活動と対抗する政府側の軍事鎮圧作戦が激化するときにあたる。政治状況が最も悪化するのは1981年から83年にかけてであり、「内戦」という形容が使われることも多い。トドス・サントスも、ゲリラや国軍の進駐、自警団の編成、犠牲者や多数の難民の発生など、直接間接に大きな影響を受けた。Carrescia のビデオは、この時期の前と後とを比較し、村とそこに住む人々にどのような変化が起きたかを追っている。

このビデオには、平和だった農村が政治のために引き裂かれかつての調和を失っていくという、ステレオタイプ化した歴史を描いているところがある。しかし、80年代前半に戦乱を逃れて、農村トドス・サントスから首都グアテマラ・シティに移り住んだ人々が直接捉えられているのは貴重である。たとえば1本目（1979年）のビデオには、はるか遠くの森からロバに薪を山と乗せて運ぶ男の子が、赤白黒の特徴ある民族衣装で登場するが、2本目（1987年）のビデオでは、成長し都会の服装をした同じ少年が、グアテマラ・シティで自動車工をしながらピッツァ店で元気よく働いている。やはり1本目に民族衣装を着けて登場し、村の祭礼を夢中でながめていた少女は、2本目ではグアテマラ・シティでピンクの仕事着をつけてメイドとして生活するとともに、夜学に通いタイピストとしての勉強を続け、スラムの家で地面に座りトドス・サントスの民族衣装を後帯機で織る。少年も少女も、既に完璧なスペイン語を身につけている。ビデオの作者は、故郷の村に帰りたくないか、とさかんに尋ね、帰りたくても帰れない状況を強調するが、口では帰りたいと答えながら、彼らに帰る気はまずないことが見て取れる。新しくラディーノが生まれる現場である。

親族や友人のルートやネットワークを通じて、農村から都市下層へと「音もなく」浸透していく人々の数は、正確には知る由もないがきわめて多数にのぼる。そしてそのような浸透が、このビデオが強調するような政治状況よりは、あるいはそれに加えて、農村の経済的・生態学的状況に起因するところが大いことは明らかである。先に触れたような人口の爆発に近い増大がもたらす圧力は、グアテマラ国内のどの地域にも共通し、農地の不足や土地の枯渇は、共同体により大きな差異があるにしても確

11) Olivia Carrescia, *Todos Santos Cuchumatán: Report from a Guatemalan Village* (New York: First Run/Icarus Films, 1982). 及び、*Todos Santos: The Survivors* (New York: First Run/Icarus Films, 1989).

実に進行している。こうして農村から押し出されたインディオから、ラディーノが絶えず、そして大規模に生産されていく。

都市に移ったインディオが、常にラディーノになるわけではない。インディオとしてのアイデンティティを保持することもあり得る。とくに近年のグアテマラでは、スペイン語教育と対置されるものとしてのマヤ語教育をマヤとして強調する傾向がみられるようになってきている<sup>12)</sup>。汎マヤ的なアイデンティティ、つまり共同体の成員や特定のマヤ言語集団の成員としてのアイデンティティではなく、マヤ全体としてのまとまりを本源的 *primordial* なものとするようなアイデンティティは、現在は一部の高等教育を受けたマヤに限って、それも希薄に見られるにすぎない。しかしこれからの歴史の中でそれが強まっていくこと、そしてそれが政治化していく可能性も考えられる。この問題が実際にどのような経緯をたどるかが、グアテマラの今後において大きなファクターになるように思われる。

「エスニックなアイデンティティの短期間における変化や変動は、民族研究 *national studies* において、考察と調査が何より緊急に必要とされている分野である」と書いたのは、E. J. Hobsbawm である<sup>13)</sup>。インディオとラディーノというグアテマラのエスニック・アイデンティティは、現実にはどのような性質のものであるのか。前者から後者への変容が、インディオはラディーノ化していくという図式的な一般論としてではなく、どのような具体的プロセスの中で実際に起こっているのか。インディオとラディーノという両者の間のエスニックな境界はどのような特徴をもち、どのように構築され再構築され維持されているのか。その境界をそれぞれの側から見たとき、それぞれどのように見えるのか。境界にはどのようなダイナミズムが含まれ、そこでは何が起こっていることが観察されるのか。こうした問題は、これまでほとんど注目されてこなかった。しかし、グアテマラに限らず、エスニシティという現象一般の理解のために、動態的に構築されるエスニックな境界に焦点を合わせるこのようなアプローチは、大きな重要性を持つように思われる。

12) Kay Warren, *op. cit.*

13) E. J. Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780 : Programme, Myth, Reality*, 2nd ed. (Cambridge : Cambridge University Press, 1992).